



ベトナム中部最大都市～ダナン 進出先としての魅力

ダナン市は投資先として大きな可能性を秘めている。首都ハノイ市と商業都市ホーチミン市のほぼ中間に位置し、地理的優位性も高い。ベトナム3大空港のひとつに数えられるダナン国際空港、古い歴史を持つダナン港を持ち、東西経済回廊の東の玄関口として陸海空の物流拠点として期待されている。

といっても、ハノイやホーチミン地域に比べれば外資企業の進出拠点数や経済規模はまだ小さい。企業の集積も進んでおらず、生産活動には資材・部材の輸入やハノイもしくはホーチミンからの調達が不可欠であり、人口も少ないため現地市場をターゲットとすることも難しい。

しかし、だからこそ人件費も低く抑えられ、生産輸出拠点としてのポテンシャルは充分にあると言えるだろう。今年7月16日にはベトナム航空による成田～ダナンの直行便が就航で日本との距離も大幅に縮小するなど、これからの優良な投資先候補として注目を集めそうだ。

投資先としての現状

まずダナンの概論を紹介したい。ダナンは人口97万人の中部最大都市であり、市北部のダナン港周辺には輸出加工特区等の物流・生産拠点多く立地している。ダナン市周辺のホアカイン工業団地、ホアカム工業団地には、日本企業を始めとした海外企業が進出している。

投資実績は右表の通り。ベトナムにとって日本はFDI(外国直接投資額)の最主要国である。2013年に暦年での外国投資額で1位の座を韓国に奪われ4位に転落したとはいえ、長くトップの地位を占めてきた。

一方、ダナン市の累計投資額を見ると、日本は国・地域別で4位に甘んじており、額でもトップの韓国の約半分程度となっている。

これは日本の投資が工業中心であるのに対し、韓国は観光や不動産で投資を拡大してきたこと。そしてダナンが観光都市としての側面を大きく持っていることを示している。

分野別で見ても不動産業が加工・製造業の2.7倍の規模となるなど、

ベトナム全土で見ても特異な割合となっている。

人件費の安価さが武器

アジア各国で人件費が高騰し続けるなか、少しでも安価な国・地域を選択することは進出先選びで大きなウエイトを占める。

JETROによるとダナンの一般ワーカーの月給は広州の3.6分の1、ホーチミンの1.4分の1、ハノイの1.3分の1程度。もちろんASEAN各国と比較してもメコン3カ国を除く進出先の中では安価な部類に入る。

ただエンジニアや中間管理職といった職能が求められる人材となると、その差は縮小する。これは発展度合いの低い国・地域によく見られる傾向で、そうした人材が少ないためでありハノイやホーチミンで雇用するケースも存在する。

■人件費比較(月額ドル)

	ダナン	ハノイ	ホーチミン	広州	
製造業	一般ワーカー	121	155	173	437
	エンジニア	218	355	347	691
	中間管理職	499	773	810	1,310
非製造業	一般職	285	389	512	881
	マネージャー	903	957	1,193	2,327

出所：JETRO「在アジア・オセアニア日系企業活動調査(2013年度)」

■ダナン市概要(2013年暫定値)

面積	1,283㎡
人口(増加率)	96.7万人(1.2%)
労働人口	48万人(2011年)
GDP(成長率)	15.6兆ドン(7.18%)
一人当たりGDP	2,800ドル
民間企業数	1.5万社(2012年末)
外国直接投資累計	279件、33億ドル

■ダナンにおけるFDI実績 (2013年12月24日時点、累計)

国・地域別		
国・地域	件数	投資額(万ドル)
韓国	34	70,553
英領バージン諸島	16	68,285
シンガポール	12	58,812
日本	70	35,854
米国	31	34,619

分野別

分野別	件数	投資額(万ドル)
不動産	26	182,750
加工・製造	88	68,193
飲料	2	32,386
教育	8	17,158
繊維・衣類	16	10,653
滞在サービス及び食品	15	4,935
建設	11	4,107
IT	26	2,448
卸売・小売	6	2,327

出所：いずれもダナン駐日代表部

ベトナム初の環境都市宣言

ダナン市のもうひとつの大きな特徴としては、2008年に「ダナン-2020年の環境都市」を発表し、環境都市宣言を行っていることが挙げられるだろう。

横浜市と「持続可能な都市発展に向けた技術協力」に関する覚書を締結。横浜市は上下水道やゴミの減量および処理などについて、環境に配慮した街づくりの技術やノウハウを、企業と連携してダナン市に提供している。川崎市も同様の取り組みを行っている。

インフラ整備も進む

インフラについて評価は難しいところである、というのがおおよその感想のようだ。

電力環境はベトナムの他地域に比べて良い方であるという評価が多数。道路も中心部は整備が進んでいる。

ダナン港は、海洋港であるティエンサ港、河川港ソンハン港などからなるが、国際海洋港であるティエンサ港を指すことが多い。取扱量はサイゴン港、ハイフォン港に次ぐ同国第3位。

同港の整備・拡張は日本による円

借款が中心となって進められている。拡張を目的にすでに第1段階として既存設備の改修を終了。今後、第2段階として拡張、第3段階として新港(リエンチュウ港)建設が進められていくことになる。

改修後、同港の需要は順調に伸びており、計画取扱貨物量である年間220万トンに対し、2012年には440万トンに達した。今後、拡張工事を急ぐことになる。



北川香織ダナン駐日代表部 主任統括官に聞く「ダナンの魅力」

ダナン駐日代表部の主任統括官、北川香織氏にダナンの現状について伺った。ダナン駐日代表部は、ベトナム政府の要請を受け、日本外務省から正式に認可された在外公館として2004年11月に開設。投資・貿易・観光促進を中心に日本とダナン市との連携強化を進めている。

ーダナンの特徴をお話ください。

北川香織主任統括官(以下、北川)ダナンは様々な顔を持っているのが特徴です。美しい海、ビーチが広がるかと思えば、大型客船「飛鳥」も入港可能な大型港もある。

観光都市として自然保護に力を入れているが、一方で工業団地へ製造業の誘致も進めている。

ハイテクパーク、ITパークも整備し、高い技術の集積を進めている。一方で、環境都市宣言を行い環境保護、クリーンな都市づくりを打ち出している。様々な顔を持つ都市、それがダナンの魅力です。

ーダナンを進出先として選ぶ日本企業も増えてきました。その理由は何でしょうか。

北川：渋滞がない、環境が良いなど様々な理由が考えられるが、もっとも大きな理由は「見に来た人が好きになること」だと思っています。

私がよく話す例えとして、恋人や結婚相手を選ぶ時、条件で選ぶ人もいるでしょうが、フィーリングで選ぶ人も少なくない。ダナンの場合は後者で選ばれるケースが多いように感じます。

訪問していただく企業も増えており、直行便も就航するのでさらに身近な存在になると期待しています。日本企業だけでなく外資企業や国内企業も増えている。駐日代表部にも「中部に代理店を置きたい、ダナンでパートナーを紹介してくれないか」という問い合わせが増加している。

ー人件費が安いことがクローズアップされています。

北川：労働力の供給市場はベトナム

国内や他のアジア諸国に比べても安定していると思います。とくに一般ワーカーは豊富です。ダナン100万人足らずだが、近隣のクアンナム省やクアンガイ省も含めると人口は約370万人にのぼる。管理職、技術者に関しては少ないので企業内で育成しているようです。

ーどういった企業がダナン進出に適しているのでしょうか。

北川：IT、製造業での進出が増加している。ユニークな進出方法としては「ベトナムでビジネスに挑戦したい」という企業がそのテストモデルとしてダナンを進出先に選ばれるケース。

ダナンは小さな都市だがまとまった人口があり、小規模にビジネスを開始するのに適している。いきなりハノイ、ホーチミンでは多額の投資が必要となるし競争も激しい。

もちろん東西回廊も将来的に期待できる。ミャンマーの開発も進み出しており東の玄関口として、ダナンの魅力はなお高まるでしょう。



ダナンの日系製造メーカー ハイテクパーク入居を決めた東京計器

ダナンには釣具のグローブライト(旧ダイワ精工)、マブチモーター、米沢電線、神威産業、タチエス、フォスター電機、東京計器など日系メーカーが進出している。ダナンにはホアカイン工業団地、ホアカム工業団地、ダナン工業団地、リエンチェウ工業団地、水産加工専用のトクアン工業団地が存在するが、ほとんどの日系メーカーはホアカイン工業団地に入居している。

加えて、現在整備が進められているのが「ダナン・ハイテクパーク」。サイゴン・ハイテクパーク、ホアラック・ハイテクパークに次ぐ3カ所目となるハイテクパークで、東京計器が入居決定1号として進出を決定、日系2社目として東京計器の協力企業である鋳造部品製造の丹羽鋳造が入居を決めている。東京計器はすでにホアカイン工業団地で生産中だが、ハイテクパークの新工場完成を待ち2015年春に移転する計画となっている。

東京計器 アジア市場でシェア奪還狙う

東京計器は現在、油圧機器のひとつである小型の電磁弁をホアカインのレンタル工業「Daiku-JV」で生産している。完成品だけでなく部品の生産もしており、現地で組み立てるほか韓国の関連会社に輸出している。

同社の生産ライン構築は急ピッチで進んだ。2012年10月に現地法人「トウキョウケイキ・プレジジョン・テクノロジー」を設立。

幹部候補6人を雇用し、うち生産ライン担当の幹部候補生4人を日本にて教育。2013年4月末に小型電磁弁の生産ラインの整備を開始。生産ラインの整備と同時に、その4人を中心に雇用した一般ワーカーへの教育と訓練を進めた。8月頭から生産を開始。10月には2直体制へ、月産1万台に。今年1月から3直体制に移行、月産3万台を確立している。類を見ない急ピッチでの達成である。

その原動力について、東京計器の生産担当取締役執行役員で、現地法

人会長の水戸部基氏は「根底には危機感があった」と話す。同社は総合油圧機器メーカーとして技術力に裏付けられた高いシェアを誇っていたが、アジア市場においてローカルメーカー(中国、韓国、台湾)が小型電磁弁市場で安価さを武器に成長。東京計器のアジアにおけるシェアが「食われ」ているという。

そのシェアを奪還するためのアジア進出であるため、よくあるアジアへの生産移管ではなく、日本での小型電磁弁の生産拠点である田沼工場のラインはそのままに、ダナン工場へは新設することになった。

前述したように同社はハイテクパークへの入居が決まっているのだが、ホアカインのレンタル工場での生産を開始したのは、ハイテクパーク竣工すら待てないという危機感から。

もちろん、生産立ち上げから増産体制構築までは、長くアジア各国の協力工場を周り、自らも設計段階から工場立ち上げまでこなしていた実績とノウハウがあったからではある。

計画によると今年度中に自社工場をハイテクパークに建設、2015年の春



「ダナンでは嬉しい誤算の連続」と
水戸部基取締役

には操業を開始することになる。

新工場での生産能力は小型電磁弁が月産3万台、また新たに現在グレードアップ開発中の中型電磁弁の生産も月産5,000台で生産することになる。

従業員も現在の日本人3人を含む50人体制から120人体制への移行を予定している。

「この体制で奪われたシェアを奪還するだけでなく、新規市場の開拓も達成する」と水戸部取締役は自信を見せる。

■東京計器のダナン拠点

トウキョウケイキ・プレジジョン・テクノロジー	(設)2012/10、(資)875万ドル、(比)100%	小型電磁弁を生産、2015年には中型電磁弁も生産開始。完成品は主に中国に、部品は主に韓国に輸出。
------------------------	------------------------------	--

ダナンに決めた理由と ハイテクパーク入居について

同社は進出先を当初はダナンどころかベトナムとも考えていなかったという。顧客の多くが海外へ展開したため「地産地消」をキーワードに海外進出を計画していた。顧客の多くが進出しているのは中国。しかしコストの急激な上昇から「中国は市場であるが、生産できる場所ではない」と判断。タイを次のターゲットとした。油圧機器の生産には高品質な鋳物が手に入ることが必須。タイはその条件をクリアし、いざ話を進めようとした時に例の大洪水が発生し、急速、協力工場が進出していたベトナムの視察に出掛けたという。

ベトナムではホーチミンに協力工場が進出していたため、当初は同市への進出を考えていた。しかし協力工場の社長に「これからはダナンじゃないかと思う」と助言され、ダナンに出掛けたという。

ダナンについての印象は「美しい街で非常にコンパクトで移動がスムーズ。道路も一方通行が多いため渋滞が

なく、移動時間が読める」というものだった。

空港からも近く、日本人もそれなりに駐在している。インフラも整備されている、と極めて好印象だったが、決め手となったのはハイテクパークの建設計画と優遇措置の篤さ。

ただ、ハイテクパークに入居するためには6業種の推奨産業であることが求められる。

「我が社の電磁弁は高品質であるが『ハイテク分野』ではない。そこでハイテクノロジーである生産設備を利用した生産活動を行う、と申請した。アピールの仕方ですよ」と水戸部取締役。

労働力の豊富さと質の良さ

ダナンのアキレス腱と思われがちである人口の少なさであるが、これも杞憂に終わったという。

最初の幹部候補生6人は全国から募ったが、以降はダナン市内での募集となった。教育を施しながらであるので、数人単位で募集を行ったのだが、8人の募集に100人規模で応募が来るほどであったという。

人柄も非常に真面目。欠勤はほとんどせず、定着率も予想以上に高いという。これまで退職した従業員は3人だけ。それも各々、進学や事故など理由を述べての円満退職であり、急に辞めてしまうということは皆無だという。

また極めて親日的である



製品組立検査ライン

とのこと。幹部候補生6人は、最初から日本語が話せることが条件で、朝の会議、提出する週報もすべて日本語、というほどだが、オペレータも日本語学校に通っている人が多いという。

「いきなり日本語で話しかけられて驚いていたら『夜間の日本語学校に通っています』と言う」。そうした従業員に対しては、夜間学校の時間帯である2直目の勤務は外してスケジュールを組んでいるという。

鋳物メーカーも進出決定

前述したように油圧機器の生産には高品質な鋳物が必須であるが、ベトナムにはそうしたメーカーが存在しなかった。だが、このたび協力工場でもある鋳物メーカーが同じくハイテクパークへの進出を決めてくれたという。

ハイテクパークに進出を決めたのは、鋳造部品製造の丹羽鋳造(岐阜県関市)。すでに100%出資で子会社を設立、2016年の稼働を目指して準備を進めている。同社初の海外拠点で、日系メーカー向けに油圧部品や農機具部品、自動車部品を製造し、旺盛な現地調達ニーズに応じるという。

東京計器は現在、完成品の8割を中国に供給しているが、韓国向けの部品供給が好調であることから、中国売上比率は4割ほど。水戸部取締役は「さらに軌道に乗れば、中国向け売上が伸長してくるだろう」と予想している。

■ダナンハイテクパーク概要

面積	総面積1,129ha (構成：生産エリア、R&Dエリア、研修・ビジネスインキュベーションエリア)
計画	フェーズ1 (2012-2015): 328ha フェーズ2 (2016-2018): 500ha フェーズ3 (2019-2020): 182.9 ha
アクセス	ダナン市内より22km、ティエンサ港から25km、ダナン国際空港から17km
推奨産業	①医療、水産・農業向けバイオテクノロジー ②マイクロエレクトロニクス、機械電子工学、光電子工学 ③精密機械 ④新素材、新エネルギー ⑤ソフト、通信、IT ⑥石油化学など
優遇措置	①法人税：15年間10%(通常25%)、同期間で課税所得が発生してから4年間は免税、その後9年間は50%減税 ②ハイテクパークおよびハイテク企業・ハイテクインキュベーショントレーニング・研究地域における建設事業に対して、土地リース料を100%免除する ③ハイテクパークにおける寮建設プロジェクトに対し、土地リース料を100%免除する
入居企業	東京計器、丹羽鋳造



オフショア拠点としての優位性 人材も豊富

ダナンがオフショア拠点として優位性を持つということは間違いない。IT人材の豊富に加え、ダナン政府による後押しも強力だ。ベトナム通信省では2020年までにITパークをダナンのほかハノイ、タイグエン、タインホア、クアンナム、クアンガイ、ラムドン、カントーなどに19カ所整備する計画だが、うちダナンには6カ所が整備される計画となっている。ITパークとは米シリコンバレー「ベトナム版」を目指して整備されているもの。この計画については賛否あるものの、IT分野で進出している日本企業は多い。

72社中13社が IT・ソフトウェア分野

ダナン駐日代表部がまとめた2013年12月までの日本企業進出リストによると、全72社のうち13社がソフトウェアの開発もしくはオフショア関連の現地法人である。

現地企業などにオフショア委託をしている企業を合わせればかなりの人数になることは間違いない。

その背景には様々な理由が挙げられるだろう。

ひとつには人材の豊富さ。同地にはダナン工科大学のほかIT専門学校が存在し、毎年多くのIT技術者を輩出していることが挙げられる。

もうひとつは人件費の安さ。大卒技術者の初任給はおよそ250～350ドル程度。ハノイやホーチミンと比べても2、3割程度下回る基準となっている。

昨今、ミャンマーをオフショア拠点とする企業が増えているが、人件費が安く、インフラに左右されない地域であるからである。

さらにダナン市政府も熱心に後押ししている。

ITパークの完成を待たずして、ソフトウェアパークビルが稼働して

いるがすでに40社以上のIT企業が入居している。

自社拠点と委託の メリットとデメリット

IT関連での進出形態は、自社拠点の設立と、現地もしくは現地に進出済みの外資オフショア企業との提携があるが、ダナンにおいては前者が多いようだ。

これまで高い技術力が必要とされるオフショア拠点は、中国の大連などが有名であったが、人件費の高騰により移転先の模索を進めている。とくに中国では高いセキュリティが求められる工程を扱っていたことから、提携と言っても外注することは顧客の反発を招く可能性がある。

実際、近頃はダナンのみならずベトナムへのオフショア拠点の自社拠点の移転が進んでいることから、中国で扱っていた高いセキュリティが必要とされる工程の移管が必要となっているのだ。

自社拠点のメリットは、情報の漏洩だけでなくノウハウの構築という面でもメリットは高い。

一方でデメリットとしては、優秀な人材を多数雇用しなくてはならないため、人件費の上昇がすぐに採算

性に跳ね返ってくる事が挙げられるだろう。

ここ数年のアジアの流れを見ると、事業可能な地域の変化および移動のスピードは加速していることは明らかであり、例えばメコン3カ国などに移転する時、大きな足枷となることが予想される。

一方、現地企業への委託では、こうした心配の必要がなくなるというメリットがある。人件費が採算の圧迫を始めればすぐに他国へ移転させればよい。

実際、ダナンには日本企業向けにオフショアビジネスを展開する企業が多数存在する。

一方ネックとなるのは、日本語能力の高い技術者の育成。ダナンの日本語学校の生徒の多くがオフショアの技術者だというのが、日本語が話せる人材は未だ少ない。

こうした問題をクリアするため、委託を決めたソフトウェアメーカーでは、委託先の技術者数人を日本本社で教育することで技術力の向上をアシストするなかで、日本語を習得してもらうというを進めている企業も存在する。

もちろんこうした取り組みは、自社拠点の立ち上げ時にも有効であり、実行している企業も少なくない。



観光面でもビジネスチャンス到来

P&Iエンタープライズが高級リゾートヴィラ開業

ダナンが観光都市の側面を大きく持つことはすでに触れた。そのダナンで日本企業として初めての観光分野での投資を実施したP&Iエンタープライズが建設した高級リゾートヴィラがこのほどグランドオープンしている。日本品質でありながら、日本ではあり得ないほど贅沢な作りのヴィラとなっており人気を博しそうだ。ただその影には多くの苦労があったという。

306～875㎡の豪華ヴィラ すべてプール付き

P&Iが今年4月にグランドオープンした「ブルクラダナン」。ブルクラとはラテン語で「美しい」という意味を持つという。その名の通り「美しい」敷地10ha(東京ドーム2つ分)とヴィラとなっている。

部屋数は306㎡のプールガーデンヴィラが14室や、875㎡のシーフロントツーベッドルームヴィラ2室など全31室となっている。

近く日本食レストランも併設する計画で、これは敷地の外周近くに建設することで、ヴィラ利用客のみならず広く集客したい考えだ。

フィリピンから ベトナムへ

P&Iエンタープライズの初めての海外における施設の建設はフィリピン。旅行会社である同社は、顧客に高い満足を与えることを狙い自社でリゾートを建設することを決定した。

フィリピンでは93年に現地法人を設立、96年にオープンにこぎ着けた。こ



プールガーデンヴィラ外観

れが好評を博したことから、2001年にフィリピンに2号店を出そうと決めた。ところが同年に911が発生。その影響でフィリピンの客が減少してしまう。この経験から同国内に拠点を集中させるのは危険だと判断。リスク分散のために他の国の物色を開始する。

同社の社名のP&Iは、フィリピンとインドネシアであり、当初はインドネシアでの建設を考えるも、宗教面を考慮すると難しいと判断。緩やかな仏教国であり、日本と文化面で軋轢が発生する危険が極めて低い国として、ベトナム進出を決めた。

当時のダナンはほとんど何もなくフランス統治時代の面影のある建物がいくつかあった程度だったという。ただ魅力のあるリゾート地であること、政府が観光業の誘致に積極的であったことから同地への進出を決定。魅力のあるインセンティブを提示してきたこともひとつの理由となった。

同社の西川彰二社長は、フィリピンの経験から「ベトナムでも4～5年でオープンできるだろう」と考えていたという。

苦労の連続 ベト研の窪田所長が支援

「トラブルの連続だった」と西川社長は振り返る。まず誰に会えばいいのかわからない。会って良い感触を得ても、話が進んでいないということも多かった。同社はビーチリゾートに拘っているのに、温泉が出ているからといって内陸部を奨めるなど頭が痛い毎日だった。

そうしたなかで支援したのがベトナム



ダナンの素晴らしさを強調する
西川彰二P&I社長

ム経済研究所の窪田光純所長だった。様々な無理難題を、ダナンに太いパイプを持つ窪田所長が「初めての日系企業による観光投資で非常に重要な案件だ」と訴え問題をクリア。

土地使用権でも揉めた。使用権の代金を全額一括または10年での均等払いしなければならない、と言われたものの、そんな額は払えない。そこで25年分を最初に支払い、残りの半分は10年以内に支払うという特殊なインセンティブを委員長から口頭で了解させることに成功。ただ特殊な条件であるため公文書になっておらず、人民委員会委員長が交替するたびにこの問題点を指摘され、都度経緯を説明する必要があるという。

これほど苦労したものの、西川社長はダナンについて「人々は非常に親日的でインフラ整備もスムーズに進んでいる。良い都市だ」と話している。



ダナン進出企業リスト

日本企業のダナンへの投資は年々増加傾向にある。ダナン駐日代表部によると2005年のマブチモーターの進出を契機に加速。2007年頃からソフト開発や設計などの分野も増加、業種は多様化しつつある。

そして新たな加速剤となりそうなのが、ベトナム航空による成田-ダナン間就航である。併せて羽田-ハノイ線の運行も開始するなど、日本-ベトナム間の距離はより近くなりそうだ。これまでダナンには、ホーチミンもしくはハノイを経由することが必要だったが、直行便の就航でアクセスがより短くなった。

以下にダナン駐日代表部がまとめた進出日本企業の主なリストを掲載する。



成田-ダナン間に就航したA321

	企業名	現地法人名	進出年	投資額・形態、所在地	事業内容
製造・加工業	大市珍味、ニチメン	DANIFOODS	1996	500万ドル、100% 水産加工 I Z	農水産物加工
	佐々木商工	SADAVI	1996	250万ドル、合併 ホアカム I Z	漁網生産
	エースコック	エースコックベトナム・ダナン支店	1993	200万ドル、合併 ホアカイン I Z	即席麺生産
	マブチモーター	マブチモーターベトナム・ダナン	2005	870万ドル、100% ホアカイン I Z	小型モータ生産
	グローブライト	ダイワベトナム	2005	4,500万ドル、100% ホアカイン I Z	釣り竿生産
	レガン	レガンベトナム	2006	100万ドル、100% ホアカイン I Z	グローブ生産
	瀬戸電子	セトベトナム	2007	200万ドル、100% ホアカイン I Z	ハーネス生産
	米沢電線	ヨネザワベトナム	2008	1,000万ドル、100% ホアカム I Z	ワイヤハーネス生産
	フォスター電機	フォスターエレクトリック(ダナン)	2008	2,200万ドル、100% ホアカム I Z	ヘッドセット、ヘッドホン 生産
	フォスター電機	フォスターエレクトリック(ダナン)	2012	57万ドル、100% ホアカイン I Z	ヘッドセットおよび部品 生産
	大石金属工業	オオイシインダストリーズ・ベトナム	2011	25万ドル、100% ホアカイン I Z	機械製造、加工
	井上リボン工業	Telala Danang	2011	300万ドル、100% ホアカイン I Z	ハンガー、レースなど 生産・加工

	企業名	現地法人名	進出年	投資額・形態、所在地	事業内容
製造・加工業	由利	ユリABCダナン	2011	232万ドル、100% ホアカインIZ	バッグ、財布生産加工
	日東浄化槽	ニットージョカ ソー・ベトナム	2011	123万ドル、100% ホアカインIZ	排水処理用タンクの生産
	東海興業	ベトナムトーカイ	2011	1,400万ドル、100% ホアカムIZ	自動車部品の生産
	神威産業	カムイベトナム	2012	900万ドル、100% ホアカインIZ	熱交換機および部品生産
	東京計器	トウキョウケイ キ・プレシジョン・マシナリー	2012	4,000万ドル、100% ホアカインIZ→ハイテクパーク	電磁弁の生産
	タチエス	タチ-Sベトナム	2012	110万ドル、100% ホアカインIZ	自動車用シートの生産
	丹羽鑄造	ニワファウンド リーベトナム	2013	2,187万ドル、100% ハイテクパーク	鑄物生産

	企業名	現地法人名	進出年	投資額・形態、所在地	事業内容
観光・旅行	P & I エンタープライズ	P & I リゾート	2006	100万ドル、100% ノンヌオックビーチ	リゾート建設
	H. I. S.	H. I. S-song han Vietnam	2006	100万ドル、100% 市内	旅行業
IT、ソフトウェア	マイルストーン	マイルストーンソ フトウェア・デベ ロップメント	2007	7.2万ドル、100% 市内	ソフトウェア生産・加工
	電腦郷	デンノーゴーベト ナム	2007	7万ドル、100% 市内	ソフトウェア生産・加工
	大六印刷	ベトナムダイロク	2007	10万ドル、100% 市内	図面設計・作成
	H R インスティ チュート	H R I ベトナムワ ン	2011	36万ドル、100% 市内	ソフトウェア設計
	西日本情報システム	V S T	2011	10万ドル、100% 市内	ソフトウェア開発
	アイ・ファクトリー	I F ベトナム	2012	5万ドル、100% ホアカインIZ	モバイル用ソフトウェア生産
サービス	セコム	セコムベトナム・セ キュリティサービス	2013	668万ドル、100% 市内	安全・監視サービス